



証言

原作 W.シェイクスピア

改作 吉田美悠

葡萄文庫

悔いても悔やまれぬ。あんなに立派なお人が死んでしまった。自分を剣でぐさりと一突き、自分で殺した妻の隣で恋するように息絶える。これのどこが勇敢な軍人のやる事ですか。なぜ皆口々に褒め称えるのですか。あの人は、將軍は、そんなに善い人ではない。あの人は私を裏切ったのだ。

はい、なにが起こったか、すべて余さず申し上げます。事の顛末を知りたくて堪らずに、あなた方は私をここに引き立てたのでしょうか。この私を血が出るまで殴り、足蹴にし、醜い拷問にかけた。それでなお、真実のいっぺんも見つけちゃいない。当たり前だ、彼がどんな人間であるかを、私以外のだれも知ろうとしなかったのだから。ただの旗持ち、正直者の、この私だけが知っている。

オセロー將軍は素晴らしい人だ。

あの堂々たるたたずまい。厳かでまっすぐで、潔い男。いつでも道を見失わない人だ。私よりずっと年寄りで、悪魔のような黒い肌。なのにあんなにも美しい奥さんがいる。

新総督、あなたは奥方をご覧になった事がありますか？　そう、デズデモーナ。あの女ですよ。私は始めからわかっていたんだ。あの女は、天使のように見せかけて、内面はだめだ。自分の父親を騙くらかして男と通い合い、果てはその夫さえ裏切る醜い女だ。ふつうの人間が一生かかっても得られない愛情を一身に受けていたくせに、どうしてあんなむごい事が出来るのでしょうか。

むごいと言えばキャシオーもそうだ。キャシオーは、我が軍の副官ですよ。上から数えていち、に、二番目、將軍の次に偉いお役職。しかし中身はすっからかんの、見た目がいいばかりの狡ずるい男です。將軍にべたべた擦り寄って気に入られ、出世が済めばお払い

箱と言わんばかりに裏切りました。どうしましたかな、新総督？ キャシオーがいかに悪辣で卑怯な男か、ご存じですか？ 正直そうな見た目をして腹の内は真っ黒。人間なんてのは皆そうだ。

だから私は將軍に二人の裏の顔を教えて差し上げたのです。將軍が傷つき狼狽える姿は目につらく、だが己を痛めつけてでも、親愛なる將軍に真実を伝えねばならないと。ただの旗手にできる事など他にありませんようか。

ええそれが理由です、それが理由なのですよ。

オセロー將軍は、かわいそうに、信頼する部下に復讐し、無邪気な妻を手に掛けた。そして結局、それを悔いて自ら死んでしまった。

ええ、もちろん！ 苦しくないわけがない。師が、忠誠を誓った主があんな悲しい最期を迎えるなんて！ 自分を裏切った者のために死んでやる義理がありますか。將軍のた

めに痛めつけたこの身はどうすればよいのですか。私の苦しみはだれにもわからないだろう、きっと將軍にだってわかりますまい。なぜなら私があの人のためになにをして来たか、あの人は知らないのですから。

いいえそれは、ほんの僅かな事です。ロードス島、サイプラス島、キリスト教国、異教徒国、歴戦限なく働いて、將軍の身を影ながら扶け続けて来ただけなのです。將軍は私に何度も感謝しました。大事な役目だって任せて下さいました。おまえは正直で信頼の置ける男だと、その言葉は真心からのものだ」と私は信じていたのです。

しかし、結局、私は旗持ち役。副官は別の男です。オセローが選んだのは私ではなかった。この知恵と働きを口ばかりで褒め称え、他の氣に入った者を隣に置き、すべての功績は自分のものだ」と信じ込む。それが偉大な將軍というものでしょうな。

わかりました。落ちついて始めから申し上げます。

そもそものきっかけはあの二人でありますから、先ずはデズデモーナの事からお話ししましょう。

將軍とヴェニス女の結婚を、私は今日を含むほんの九ヶ月前まで予想だにしていま
せんでした。どんなに二人が親しげでも、誓って、そんな気配を感じた事はなかった。彼女
の父は元老院議員です。デズデモーナは当然、家柄に合った男との結婚が期待されてい
ました。まさか異国の軍人の黒い胸を閨の供に選ぶなど、だれも考えちゃいなかったの
です。

以前から將軍は議員閣下の招きでひんばんに屋敷を訪ねていて、私もそれに付き添っていました。その日も、物々しい格好でのんきに過ごす彼らのお喋りを聞いていましたら、そこにデズデモーナがいたのです。やわらかい敷き布の上にドレスの裾が触れるか触れないか、そのような希薄な存在感でありながら、だれよりも白く光って居りました。

頬は幽かに赤く、少女のように笑ってはすぐ恥じらって目を伏せる様は一心に注目を集める。だがデズデモーナの目は、ただ一点、將軍を見ていました。身の上話、過去の戦い、故郷の国の景色、つらい放浪の日々が語られる度、眼差しは温度を上げていく。その熱に気づいたのは將軍自身より私のほうが先だったでしょう。血なまぐさい昔語りはお屋敷住まいのお嬢さんには刺激が強すぎやしないかと横目にうかがえば、ばちりと目が合った。合って、微笑んだ。それがまるで男を褥に誘う女の微笑みのようでありましたから、従者に囲まれるあどけない容貌にそぐわないと思つて、そばへ寄つて行きました。ちょ

うど將軍とご父君が二人で席をはずしたときでした。腰掛けのかたわらへ膝をついて挨拶をすると、デズデモーナは私には微笑みつつただけで、すぐ將軍の去った方向へ目を向けました。

「あのお方の——とても興味深いお話だわ」

「お気に召しましたか」

「あなたはあの方の部下なの？」

ほうっと湿った、名残惜しい溜息。デズデモーナはすっかりあの男に惚れ込んでいたわけです。きょう会ったばかりの異邦人に。無垢で可憐なお嬢さんなど、とんでもない、それは色恋に惑わされる物知らずの女の顔でありました。

「あの方は我らが偉大なるムーア將軍です」

「素敵。まるでお伽噺に出てくるような人ね。あんなにつらい経験をしているのに」

デズデモーナは背後の従者を振り返って同意を求めます。瑞々しい髪が波打って、幾らか年を食った女の従者は関心なさそうにその髪を整えてやりました。

「すべて本当にあった事だと思いで？」

「あら、作り話って事？ 酷い事を言うわ。あんなに立派な人が嘘なんてつくわけない」
嘘つきは嘘つきの見た目をしていないものだ。そんな事も知らないままだ愛されて生きて来た女は、私の酌で少しのワインを飲み機嫌良く笑っていました。

そうしてこの後に、二人は父親の目を盗んで愛を育み、遂には結婚の約束を交わしたのです。婚約の報せに、二人をよく知らぬ者は驚いたでしょうが、私はまったく驚きませんでした。ええ。あの女がどれ程の淫乱か、話せばすぐにわかったのですから。將軍の袖をいじらしく引いて、女はきつこう言った。「ねえ、もっとお話を聞きたいわ。二人きりになりましょう」。

はい、仰るとおり。キャシオーの事も話さねばなりません。しかし順番になりますと少しやりにくい。はつきり申し上げますが、キャシオーがはじめに裏切ったのは將軍ではなく私なのです。そのときまで、私たちはよい友人でした。キャシオーは同僚で、私より年下のフローレンス人です。真面目な性格で私によく軍人としての教えを乞うて来て、二人でいろいろな話をしました。

しかしあの日――私はその友人に裏切られたのだ。まだそれほど前じゃない。キャシオーが副官に任命された日に。

ヴェニス軍部の中庭で何人かで集まって組み手をしていた。剣の腕前も実戦の経験も皆私が一ばんだと認めていました。真面目なキャシオーは私と何度も相手をしたが、

隣に座って汗を拭きつつ戦場での事をいろいろ尋ねて来ました。他の連中は私たち二人を盗み見て絶えず浮き足だった様子でした。どの者の頭にも、今このとき宮殿で行われている副官決定の会議の事がこびりついていたのです。おそらく副官は私たち二人のどちらかがなるだろうと噂されていましたし、私たちもそれを承知していました。そんなもの明らかなのです。決定を待つまでもなく、実力も功績も証明している。副官は私でした。キャシオーではなく。

キャシオーは尊敬の眼差しで私を見ました。

「街の役人が直々に、あなたを副官にと頼んで来たと聞きましたよ」

「参った、君にまで伝わっているのか」

キャシオーはひどく汗をかいていて、甕の水で顔を洗いました。

「まだわからないさ、君かもしれない」

「あなたは謙虚な人だ。偉ぶったところがない」

偉ぶるとは馬鹿がやる事だ。自信を持ってないことの現われだ。私ほど自分の力を正しく評価している者はいません。しかしキャシオーも、若さと地位のわりには謙虚な男でありましたから、優秀なのに違いはないのです。そう、たとえば旗手とか、そうすればこれから私の下で経験を積んでいけるでしょう。

コップ二つに水を汲んで片方を私にやり、喉を鳴らして飲み干すキャシオーの、その背後から將軍が現れました。静かな面持ちでしたが、任命会議を終えてここまで来た事は明らかでした。

「マイケル」

呼ばれたのは、キャシオーの名でした。親しみを込めたファーストネーム。

振り返ったキャシオーが、なんの疑いもなく、喜色を隠そうともしない声色で返事を

したとき。私ははッと悟りました。はめられた。この若者は最初から知っていたのです。副官に選ばれるのは自分だと。経験も、功績も、実力も足りない。しかしえ、こひいきされる才能だけは、あるいはおれより勝るかもしれぬ。世の中力だけでは駄目なのだ。今はどれだけ上手くやって好かれるかが問題だ。私より先に知っていて、出し抜いて、素知らぬ顔で笑っていたあの男は卑怯者です。

將軍はキャシオーのそばへ行つて肩を叩き、次に私の顔を見ました。その眼の光に、荒波が打ち付ける岩礁の硬さを見ました。あるいは甲板に容赦なく照り付ける太陽に目眩がしたときの心地でした。將軍はいつたい何をお考えなのか。私の手柄や知恵を褒め称えておきながら、なぜ足で踏みつぶすような真似をするのか。將軍は怒りも悦びもない面容で小さく頷き、私は微笑んで頷き返します。キャシオーがほんと安堵の溜息を漏らしました。やがて二人は、隣同士に並んで歩き去って、私は一人で最後まで見送りまし

た。

手に持った飲み水は冷たい。その場は、固く暗い岩壁の日陰でした。手を傾けると水は細い線になって下に落ち、私の足元に汚らしく流れます。何者かが遠大な意図をもって描いた作戦図のように。

それでもまだ私はマイケル・キャッシュをどうにかしようと思っていたわけではありません。副官の地位に立ったキャッシュオーは偉ぶる事がなく、仕事ぶりは下っ端の頃とも変わらぬ真面目さでありましたから、まわりもその分不相応な昇進を疑うどころか称賛していました。私にも寛大の心というものはあります。彼はまだ若いのだから、それゆえの卑怯さ、傲慢さが現われる事もあるでしょう。いつか彼が、実力が追いつかず身を滅ぼす事になったとき、友の情けで助けてやればよいと、そのときには將軍の目も覚めるだろうと、旗手の地位に甘んじました。

その寛容を叩きのめしたのもまた、キャッシュオーであります。トルコ艦隊との戦いを終えてここに上陸した日、あの浮かれた夜の事です。敵艦を壊滅せしめた危険な嵐をよう

よう乗り切った我が軍、その幸運と勝利に皆が騒ぎ、焚き火があちこちで昼間のように影を作っていた。私は軍の詰め所にて、見回りの仕事に向かう副官を引き留めました。夜警の任を受けたとはいえ夜更け迄まだ幾らもある。将軍も部屋に引きこもってお楽しみ。こんなときに馬鹿真面目に仕事をする奴があるものか。外では連中がとくに酒盛りをはじめていました。

「僕は酒に弱くてね」、彼は恥じらって告白しました。

「まあ、まあ。ほんの一杯だけ」

焚き火の前に連れて行けば歓声が上がりました。皆新しい副官を待ち望んでいたのです。酒宴の中心に入ればさすがのキャシオーも断れない。我々の勝利を、副官就任を、將軍の結婚を祝した酒はどんどん進み、私は黙ってキャシオーに酌をしました。明るい夜でした。炎に当たり続けるのを熱がって少し顔を逸らした鋭い輪郭に赤い火の色が映っ

ていた。酔いどれの笑い声が月まで揺らすようでした。

私はそれほど飲んだ覚えはなかったのに、ふと気がつくと酒宴の人ばかりは遠ざかり、私とキャシオーは焚き火の前に二人きりでした。キャシオーは真つ赤な顔で手酌して、頭はぐらぐら、とても夜警などできない有様です。会話が途切れ、私は焚き火の影を凝^じつと睨みつけながら、昔イングリランドで覚えた歌をうたいました。すると、横から低い笑い声が上がりました。

「酔っ払ってうたうなんて軍人の地位にふさわしくないな」

それは私に対する嘲りだ。

男は酔っていた。本人の自白どおり酒に弱く、見回りの仕事も謙虚な副官の仮面も忘れてしまって、あとに出て来た言葉は私への侮蔑でした。

杯に口をつけると中身はもう空でした。

「そんな事はするものじゃない。天なる神はすべてお見通しだ——救われるべき魂もあれば救われない魂もあるんだ」

向こうで鶏のように合唱する間抜けな集団を眺めている。果たして、救われるべき魂とはだれで、救われない魂とはだれなのか。私は將軍夫妻の寢室、その高いところにある窓を見上げて言いました。

「副官の仰るとおり。そして私は救われる側ですな」

「ああ、だが、俺のほうが先だ」若く朗々たる声。キャシオーが私を見たのを気配で知りました。きっとその顔は笑っている。將軍に声をかけられ、振り向いた、あのときと同じ顔だ。

「救われる順序も、旗手より副官が先なんだ」

偉ぶる奴は馬鹿だ。己の実力も知らず分不相応の地位に舞い上がるのはそれ以上の愚

か者だ。この男はいつも笑顔の裏で旗手の私を見下していたのでしよう。どうだ、まんま
と出し抜いてやったぞ。机上の算術などなんの役にも立たないのだからと、これ迄私が
教えてやった戦略、見せてやった立ち回り、すべては元々自分が持つて生まれたものだ
と勘違いしている。裏の顔を知るのはこの世で私だけでした。狡猾な表の顔に將軍は騙
されて、自分の隣にこの男を並べた。もはや待つのは我慢がならぬ。私はどうにかして、
この副官の本性を將軍に知らせねばと考えました。

キャシオーは最後の酒を飲み干して今更仕事に行こうと言ひ出しました。私や他の仲
間が止めても聞きやしない。千鳥足をふらふら、見回りへ出て行くのに皆呆れ返り、私は
困り顔を振り撒いてから追いかけてました。友を心配して助けに行つたように見えたでし
ょう。副官は人気のない方へ向かつていました。足音を潜めて後ろをつけ回し、物陰に身
を隠して、手は徐々に腰のところへ。そこには私の劍がある。いや、殺すなどと、そんな

恐ろしい事は考えちゃいません。ただこの男の狡さ、愚かさが、どうしようもなく。そう！ 將軍に傷をつける前に私がどうにかするべきだと、そう思っただけなのです。

突然、キャシオーが止まりました。私に気づいたからではない。我々の他にもう一人、キャシオーの目の前に男が飛び出して来たからです。血走った目、荒い息。尋常のものでない人間とは一目でそうだと判るものです。その男は痩せて背の曲がった醜い姿でしたが、剣を両手で持つていました。キャシオーが誰^{すいか}何しても答えず、切っ先をガタガタキャシオーに合わせ、そして、切りかかるの寸前の間に、その目が遠くの私を見ました。

キャシオーは気づかなかった、私だけが気づいた、縋るような男の目。私は腰にかけていた手を下ろし、一步二歩後ろへ下がりました。この副官はもう駄目だ。私が剣を抜かずとも自らの行いで滅びるのだ。その行いが形を得、今殺意となって目の前に立ち塞がっている。

何食わぬ顔で焚き火の前へ戻り、心配そうな島のお役人にキャシオーの様子を訴えました。どうしたものか、若き優秀な副官はあのようにしょっちゅう酒に溺れて騒ぎ出す。

酷い病癰にみんな困り果てているが將軍はお気づきにならない。困った困った、そう言い合う役人をひっぱたくような大声、キャシオーの声が、突然、広場中に響き渡りました。やったかと思つた。しかしそれは、悲鳴でなく怒声だった。宴会の真ん中にキャシオーと男がなだれ込み、互いを罵倒し襟を掴み合う。さらには二人とも剣を振り回していましたから、その場にいた者は慌てて止めにかかりました。キャシオーは手が付けられずに暴れ、滅茶苦茶に振り回した剣が無関係の役人を傷つけます。私は声を張り上げて人を呼びました。どんどん集まる人はキャシオーを押さえつけ、それに紛れて喧嘩相手の男は消えてしまった。気の狂った副官は剣を取り上げられ、羽交い締めでもまだ収まらず、やがて私の声に目を覚ました將軍が降りてきました。とうとう、その醜態が將軍の

目にも知られたのです。

將軍の声を聞いた途端に青ざめたキャシオーの顔といったら！ 先ほどの言葉がはね返ってきたのですよ。――「軍人の地位にふさわしくない」。あの場でふさわしくないのはだれだったか、あなたもよくおわかりですね。

喧嘩騒ぎを起こして怪我人まで作ったキャシオーに將軍は厳しい目を向け、次に私を見ました。嘘も誤魔化しも赦さない、一睨みでこの世のあらゆる不正を糾弾し尽くすような恐ろしさでした。私は、この場で最も信頼できる部下として、起きた事を正しく訴え副官を庇いました。しかし取りなしにどんな意味があるか。もう將軍は知ってしまったのだ、キャシオーの未熟さと腹に隠した気性を。ああ、不幸にも大勢の人間が集まったせいで衆目にも晒されてしまった。

將軍は、容赦も慈悲もなく、全員の前で宣言しました。

「キャシオー。お前をもう副官にはして置けない」。

キャシオーはよろめいて、しかし、もう支える者はいませんでした。あれほどたくさんの仲間に囲まれていた男は今無様な孤独に晒されている。

將軍が去り、野次馬も引き上げたあと、私はうなだれるキャシオーへ慰めの言葉をかけてやりました。みんなの前でこのような不名誉を晒してかわいそうな事です。私を陰で笑っていた自分の愚かさがこれで身に沁みたでしょう。優しく励まし続けると、キャシオーは手のひらで瞼を何度も擦り、唸り声を上げてから、ふっと顔を上げました。今思ひ出しただけでもぞっとする、その顔は笑っていた。

「デズデモーナに復職の取りなしを頼もう」

なぜ、デズデモーナなのか。この男は恥知らずにも女を味方につけて將軍を騙そうというのか。あの無垢で物知らずなデズデモーナならキャシオーの頼みを優しく引き受け

るでしょう。そして恐ろしい事に將軍はあの若妻に首ったけで、どんなお願いも叶えてやっている。

罪深い奴というのは何度だって罪を重ねて前へ前へと追いついていくのです。私はそれが許せなかった。正直者のこの私はいつまでも後回し。そんな道理があつてなるものか。

私だけが、救われるべき魂の、ほんとうの順番を知っているのだ。

新総督。ここまでの話でもキャシオーとデズデモーナがいかに酷い人間であるかよくおわかりかと思えます。しかしまだ辛抱していただきたい。肝心なのはこの二人が將軍を裏切った、その一点にあるのですから。

キャシオーは本当にデズデモーナに話をつけてしまいました。なにも知らないデズデモーナはこの男を哀れに思つて、女の貞節もわきまえず將軍へ考え直せと訴えはじめました。おかしい事ではありませんか。女というのは仕事の事に口を出さないのが決まりです。ましてあの貞淑な——色恋に關しては醜い好奇心を持った女ですが、少なくともこれ迄は立場をわきまえて夫に従順であつた——デズデモーナが突然そんな行動に出るとは。いや、もしかしたらあの美人は本当に慈悲深いお人で、キャシオーにもその慈悲を

かけてやっているのかもしれないと、そう考えようとした事もありました。しかし私は間近に見たのです。あの甘い声がとろけるように「キャシオーを許してやって」と囁き、將軍をしつこく追いかける様を。慈悲をかけるにしてもあれは度を超した必死さでした。自分となんの関係もない他人のためとは思えませんでした。何か訳があつたに違いない。そして訳というものに実は心当たりがありました。デズデモーナとキャシオー、この二人は仲が良かった。それがどうにも怪しいのです。

そういえばあなたもあの男と同じフィレンツェのお生まれでしたな。花の都では挨拶というのはどうするのですか。気障たらしくハグやキスをするのが紳士の流儀なのでしょう。そう、そんなふうに指をそろえて、キャシオーは頻りにデズデモーナへキスを送っていた。いいえあのやりようはただの挨拶ではありませんでしたよ。私の女房にした挨拶はただ一度きりのそっけないキスだけで、キャシオーはずっと美しい若妻のほう

を向いていました。二人で顔を近づけてひそひそ話す事もあった。そのときもしかしてと思っていました。私は昔から些細な違和感を見つけるのが得意ですから、妙に親しげな二人の事が以来ずっと引っかかっていたのです。だからあのとき、キャシオーが將軍に取り入るためにデズデモーナの名を出したとき、そしてデズデモーナが頼みどおりの行動を取ったとき、合点がいました。私は生来疑り深い男です。一度思いつくと口に出して確かめずにはいられない。私の悪い癖だ。しかしこの疑いが、そうだと思いたくはないが、それでももし本当だったとしたら、二人の罪はどれほどのものでしょうか。それを知らぬまま二人を愛し続ける將軍が不憫でなりません。どうしてそばにつき従う私よりも、尻尾だけ振って内面は見せないあの二人のほうを選ぶのか。その白い腹を裂いて真つ黒な中身を知らしめてもなお、二人の事を愛すと言えますか。私は正直な男です。ですから自らの疑いを將軍にそつと打ち明けました。閣下、実は。いえこれは私の

中にあるほんの小さな引っかかりなのですが。やはり言うべきではない、あなたの素敵な奥様と部下を侮辱するような事を。しかしどうにもおかしいのです。ああどうかお許し下さい、あなたの胸に疑いの種を蒔かざるをえないこの私を。これはただの憶測です。

しかしどうしても聞きたいとおっしゃるならば申し上げます。

キャシオーとデズデモーナは——密かに通い合っている！

水を戴けませんか。喉が渴いてしょうがない。グラスにほんの一杯、はい、ありがとうございます。

私はあのときの將軍の顔が忘れられません。不貞の疑いを口にしたまさにそのときの様子、口元から笑みが消える瞬間を。將軍は、大海原のように大理石のように冷静で立派な人であると皆が口々に言いました。しかしそんな筈がない。本当は私の言葉ひとつでこれほど動揺する男なのです。はじめは真面まともに取り合っていなかったのに、話を聞くうちにだんだんと太い眉が寄っていききました。額に汗が浮き上がりました。真っ黒の指が苛立ったように動いて、落ちつきなく自分の顎や鼻を触るのです。私の前では強気を保ってまっすぐ立っていました。私が去った後、忽ちうなだれて座り込んでしまいました。

た。將軍はデズデモーナへの愛と私の言葉に板挟みになっていました。ああ矢っ張り、私が忠誠を誓い何度も見上げたお方はただの滑稽な人間であつたのだ。いつも人に囲まれる背中が孤独に取り残され苦悶している。その老いたみつともない背中を物陰に隠れてずうっと眺めていました。胸が痛かった。己の心臓の形をまざまざと思い知らされる痛みでした。ここ、ここに、あのとき確かに感じた。息苦しさ、身を隠す壁の固さ、ランプの炎のまぶしさ。私は、その場で叫び出したくなりました。それでは將軍に見つかつてしまふ。息を殺してうかがうと、將軍は私の存在に気づく様子もなく、頭を抱えて何度も唸り声を上げていました。私は今すぐにでもここから出て、寄り添い、優しく撫でてやりたい気持ちに駆られました。おう可哀想に。私のせいであなは苦しんでいるのですね。あの二人がどんな行いをしていようと、関係がないではありませんか。あなたには私がついているのだから。

しかし、実際に將軍の背を労ったのは後からやって来たデズデモーナです。彼女は驚いて、熱を出した赤子にしてやるように將軍の汗をハンカチで拭い、謔言のような言葉をゆっくり聞いて慰めてやりました。しかしどれも的外れなのだ。「これは」とあらたな根拠を掴んだ思いでした。そうか、デズデモーナはただ佳き妻として振る舞いたいだけなのだ。夫がなにに苦しんでいるかなどどうでもいいのです。手当てをして食事を食べさせて、ついでに甘い睦言のひとつでも落とせば良くなると信じている。周りの者は將軍も含めみんなこれに騙されていたのか。デズデモーナがどんな淫乱であるか初めて会ったときから知っていたというのに、私でさえ危くその美しさに惑わされかけていたのです。

將軍が頭痛を訴えたので、デズデモーナは従者の用意した水差しで辿々々水を飲ませてやりました。將軍は喉を落ちる冷水に目を細め、癒やされきったように頭を女の胸

に委ねるのでした。

ああどうしてこんなに喉が渇くのでしょうか。胸が潰れそうだ。グラスにもう一杯戴けますかな。不思議な事に、どれだけ飲んでも些^{ちっ}ともも満たされないのだ。

疑心と愛、二つの頼りない境目で揺れ続ける苦しみはどれほどか。一晚、時間を置いたその翌日、まだ明るいうちから將軍は私を見るなり掴みかかって来ました。板挟みに神經が衰弱しもう堪らなかったのでしょう。疑心というのは、一度浮かべばつきまとい自分信じてきたすべてを疑わしく見せる毒。愛するものをそばに置くのを拒んで、だがそうしてやって来る孤独は恐ろしく、あとはもう私を恨むしかないので。私の言う事が本当ならば証拠を見せろと將軍は言います。妻の事は疑えなくても私の言葉は疑えるのか。ここ迄来てもあなたは私より彼らを選ぶのか？

いいえ、どんな言いがかりでも私は責めたりしません。証拠を示せばよいのです。狭間

で大きく揺れば揺れるほど、片方に傾いたときその想いはより強くなる。私は自らの疑いにちゃんと証拠を持っていました。ええ、知っていますとも。私はよくよく、あなた方の事を見ていました。ひっそり隠れて通じ合っていたつもりでも、私のこの目は誤魔化せない。

ところで新総督、あなたは眠っている間にぶつぶつ独り言を話す事はありませんか。世の中にはそういうだらしない人間がいて、自分のした事を何もかもばらしてしまう事もあるというでしょう、キャシオもそうでした。兵舎ではよく寢床が隣同士になったのですが、ある夜に寢言でこう言っていた。「かわいいやつ。僕らの恋は秘密にしてください」。そうして隣に眠る私を女と勘違いして抱きしめた。これは間違いなく、キャシオーが良からぬ恋をしている事の現れです。私は激高する將軍をなだめながら、ただの夢の話ですがと前置きして、こんなふうに聞かせました。「ただの夢ではありますがね。そ

それでもこう言うのを聞いたのです。『かわいいデズデモーナ。君をオセローになんか与えなければよかった』……。自分の願望を夢に見る奴もごまんといますから、まだわかりません。しかし他の疑いと合わせて考えると……」

將軍の目が凍り付いた。どうか嘘だと言ってくれと懇願する顔でした。ですが將軍こそ、私を正直者だと知っている人です。その心は疑心へと大きく傾いて、あともう一押し。震える肩を優しく撫でてやりながら私はその耳元へそつと囁きかけました。

「奥様のハンカチは今どこにありますか」

ハンカチ。純白に赤いイチゴの刺繍をしたこの世に二つとないハンカチ。將軍がデズデモーナへ贈った最初の贈り物で、彼女はどんな宝石よりもそれを大切にしていました。しかしそんなもの、たとえそれが父親から贈られたものでも、従者からでもキャシオーからのものでも、彼女は同じように大切にしたいでしょう。あれはそういう女だ。移り気で

誰にだっていい顔をする。

なにかを予感したように將軍は大きく息をつきました。そのハンカチと同じように真っ白だったはずの愛が黒く染まっていくのを私は間近に見ていました。ハンカチは今デズデモーナの元でない。どこにあるか、私は知っているのです。

「もしかしたら思い違いかもしれませんが、キャシオーが、あれを持っているのを見かけました」

忽ち、迷いが掻き消えました。乱れよじていた幾つもの感情の波が、ずっと一本の線になって、それは屈辱の怒りでした。怒りはやがて殺意に変じ、血が沸き立つような衝動へ。「殺してやる」と將軍は叫びました。戦場で敵兵へ向けるものとは較くらべものにならないとお粗末加減だ。それでも私はその殺意に報いようと決めたのです。かわいそうに、悪辣な人間の本性を見抜けず愛し続けた將軍を待ち受けるのは孤立、ただそれだけ。そのと

き私がそばにいれば、將軍は今度こそ私に感謝するでしょう。私の働きを、献身を、本物の知恵を深く思い知ればいい。將軍は妻を殺すと言いました。ならば私はキャシオーを殺しましょう。あの間拔けな浮氣者を今度こそ酷いやり方で。

新総督は私の言葉をお疑いなのです。キャシオーが寢言で呼んだ女の事ならさつき申し上げたではありませんか。いえ、ああいう事は何度かありましたが、私がはつきり聞いた名前は、たしか――ビアンカと。キャシオーが裏で遊んでいる娼婦です。はい、デズデモーナの名前は聞いていません。でもキャシオーはあのとおり上辺だけ見せかけた軟派な男でありますから、私を尊敬するふりをしながら出し抜いて出世するような男でありますから、複数の女と関係を持つていても不思議じゃありませんよ。そうでしょう。だから、誰を呼んだかなんて、些末な事です。

將軍はハンカチの事を問い詰めるためにデズデモーナの元へ向かいました。巨体を重そうに引きずり足音を立てて屋敷の中を這い回る、その姿にすれ違った誰もが眉をひそめます。まるで別人のようなのです。

私は將軍の後を追いかけてました。デズデモーナは失くしたハンカチを探し回っている筈だ。あれは今キャシオーが持っている。本当ですとも。今朝ビアンカに見せびらかしていたのを見ましたから、嘘をついたって誤魔化せない。恋人からの贈り物を他の男が持っているとなれば、二人の罪はもう明らかでしょう。

私が後から夫婦の部屋に辿り着いたときには、もう二人の諍いは取り返しのつかないものになっていました。夫のほうは「ハンカチを見せろ」と怒鳴りつけ、妻は哀れっぽく

「キャショーを許してあげて」と取り纏る。仲睦まじい夫婦とはいったい何の事か。怒り狂う將軍は、部屋に入って来た私に気がつき、ぴたりと口を閉じました。

血走った強すぎる眼の光がデズデモーナを見、自分の手元を見、それからもう一度私を見ました。救いを求めるように。私は幽かに微笑わいました。

やがて將軍が一人で立ち去ると、後には呆然としたデズデモーナとその従者が残りました。私はデズデモーナを慰め、従者の物言いたげな目を遮って、すぐにその場を離れました。私にはわかる、もうすぐそこ迄来ている。立ち去った將軍の背は私を呼んでいました。

後を追った先は、砦の高い塔の上でした。風の強い日でありました。そう、これはちょうど今日の昼間の出来事ですね。前方の海は巢穴で警戒する獣のように低く唸って、波の飛沫に唇が湿りました。私は長い間そこに立って將軍の姿を眺めていました。白のマ

ントが灰色に曇った空と混ざって境目を失くしていきます。

將軍はほとんど錯乱の様相でした。独り言を呟き、同じところを歩き回り、また独り言、頭を抱える。あるいは私に向かってどういう事だと叫ぶ。風が耳元で逆巻いて答える自分の声さえよく聞こえないというのに、將軍の気の違った声だけは鮮やかなのです。

このような声色を他の誰が聞いたでしょうか。どれほど厳しい戦闘のさなかにも前を向いていた堅牢な男の影はどこにもありませんでした。將軍の功績や強さに頼って褒め称えるしか頭のない連中はこの姿を見て失望するに違いない。怒りと屈辱に狂った男が元の形を取り戻すにはもはや二人を殺す以外にありませんでした。この世のすべてに恵まれていた將軍はなにもかもを失い、みすばらしく見放される。私だけは、そんな事はありません。なぜなら私は、將軍のどんな姿にも失望などしないのですから。

足元にうずくまっとうなだれた男の元へ歩いて行って、凝^じっと、静かに見下ろしまし

た。海から流れる風は白いマントをなびかせて、闘いを凱旋したまさにそのときのように光って見えるのです。目が眩みました。何かを綺麗だと思うのはこれが初めてでした。戦いの終わりに見た風いだ水平線のきらめき、あのときのデズデモ^{つや}ーナの艶めいた吐息、酒と焚き火に赤らんだキャシオーの尖った横顔。そのどれにもこのように心を動かされた事はなかった。この一瞬の間だけ、私はただの人間だったのかもしれませんが。オセローと同じ。

「私はここに、その働きのすべてをオセローのために捧げると誓います」

新総督。あなたなら將軍になんと言葉をかけられたでしょう。信じた部下にも愛した女にも裏切られた哀れな男を前にして。あるいはあなたに私と同じ事ができたでしょうか。あなたの言葉でも、將軍は同じだけの絶望と安らぎを感じられたでしょうか。

風はいつの間にか風いでいました。

私は地面に膝をつき天に向かって誓いの言葉を立てました。向き合った將軍の表情は思いがけず穏やかでした。満足そうな笑みで、白いマントを翻し、真っ黒な衣装の懷から取り出したナイフで手のひらを切る。

「今からお前が副官だ」

同じナイフで私も切れば、この手から赤い血が流れ出しました。

血だ、血だ！ 私はこのときやっと生まれたのではないか。他に誰もいないここでオセローの隣に立ち、忠誠を差し出す。脈打つ心臓の上に手をあてて、正直者の私は、悦びのままに答えました。

「いつまでもお仕えます」

決行は今夜に決まりました。

あのとき。酔っ払ったあなたが騒ぎを起こして副官をクビになったあの夜。あなたに襲いかかった男が誰だかわかりますか。ロダリーゴという、同じヴェニスで、私の友人です。あの男は死にましたか。ついさつき私が刺したのだ。この手に未だ感触が残っている。いや、これはあなたの脚を刺したときの感じだろうか。そう、刺しました。ロダリーゴに氣を取られたあなたの背後から右脚をぶすりとね。殺せなかったのは本当に残念。ロダリーゴは金に困っていたから、故郷くににいたときから私がいろいろと便宜をはかってやっていたのです。ちがう金じゃない。ロダリーゴは女に執心していたのです。デズデモーナ。可愛いそうに、うだつのあがらぬ小金持ちが美しい人妻に想いを寄せて叶うはずもないというのに、あの男はしつこく私に仲介を迫って届きもしない宝石や金を貢

ぎ続け、後を追ってこのキプロス島に乗り込んだ。あげくに彼女からの返事がないのは私が貢ぎ物を掠め取っているからじゃないかとまで疑うのです。ほとほと困り果て、ちやうどキャシオーとの仲を疑いはじめた頃でもありましたから、私はこの男の愚かな衝動に逃げ道を示してやりました。——キャシオーを殺せばデズデモーナはすぐにでもお前に乗り換えるよ。あの女は、老いぼれ將軍で名声を叶え、他の若い男で色欲を満たしているに違いないんだから。デズデモーナの愛を奪っているのは副官殿なのさ。……私は間違った事を言っていますか。デズデモーナは頭の足りない淫乱で、キャシオーは殺されても仕方ない卑怯者。これ迄の話からも明白じゃありませんか。

將軍からキャシオーを殺せと命じられ、私が真っ先にしたのはロダリーゴに手紙を書かせる事でした。暗殺を手伝わせ、上手くいけば副官となった私から將軍に口利きしてやってよいと約束して。ああ、そう、その手紙です。『私、ロダリーゴは、デズデモーナ

をたぶらかして不貞を行ったマイケル・キャシオーへの報復の為に殺害を実行する』。間違はなく本人の字だ。キャシオーを襲ったのは私でも將軍でもない事はこれで明らかでしょう。あの男が親愛なる副官を刺したから、私が反撃として殺したのです。ほら手にまだ血の痕が残っている。あああ新総督、奴に刺された脚の傷はまだ痛みますか。本当に恐ろしい事だ。

恐ろしいと言えばエミリアもそうだ。エミリア。私の女房です。デズデモーナに長年仕える従者で、初めて会ったのも父親の議員閣下の私邸でした。年増の不美人、口が達者なのだけが取柄の何の見どころもない女。私の気を引きたがっている口を出し、ときどき白絹なんかを贈ると満足して黙りました。女は決まって言います、「愛しているわ。あたしにはあんたしかいない」。愛だって？ お前からのそんなものはいらぬ。だが女房はそれがないと生きていけないというから、私はいろいろと用事を言いつけました。

飯を作れだとか、酒の用意だとか。街の役人に次の副官が誰になるか探らせたり、デズデモーナのハンカチを取ってこさせたり。

奥様の宝物のハンカチをおれが何に使うか、あいつはなににも聞いてこなかった。よくやったと言えば喜んだ。あれは私に従順な女です。女房というのはいつでも旦那のそばにいて最後には隣の墓に入るものでしょう。だがあいつは、私を悪魔と呼んだ。大勢の人間の前で私を罵った。そこは將軍夫妻の寢室で、島の役人と軍の連中、キャシオー、エミリア、そして將軍とデズデモーナがいました。デズデモーナは死んでいました。將軍が首を絞めて殺した後の事でした。エミリアは、ベッドに横たわるあわれな主人の死に顔を見て、大声で泣きわめきました。自分のした事が主人を殺したのだと今更気づいたのです。

「黙らない。ハンカチは、私が拾って夫にやったのよ！」

何が悪党だ。私を裏切ったのはお前のほうだ。だからやった、だからやったのです。だから私はエミリアを殺しました。それはあいつの口を封じるためではない。私でなくデズデモーナを選んだ、その報いです。おお、新総督、あの女は死ぬ前に私の名を呼びましたか。その冷たい身体はこれからどこに埋められますか。

たった今、私のこの緑の目にはもう、あの人の最後の姿しか見えていません。すべてが明らかになった後、そこにはオセローが妻を殺したという事実のみが残った。オセローは胸を張り、取り囲む連中を睥睨^{へいげい}し、剣を素早く抜いた。その銀色の奔^{はし}りが月光に光って私を見た。剣先は迷いなく自身を向き、ひと突きで心臓を貫きました。呻き声の一つも上げず。そのとき、私はなにをしていたでしょうか。覚えがありません。すぐ近くにいたのか、ずっと遠くにいたのか。だがきつとそばにいた。かつてこの世すべての栄光を浴びた一人の男が愚かしく自害するのを凝^じつと見ていた。私がそこにいる事をあの人だっけ知っていた筈です。なのにオセローは、私などいないかのように、胸から血を流しながらくると身軽に背を向けて、ベッドのデズデモーナへ語りかけました。その隣に横たわ

り頬を撫で、静かに唇へキスをしました。

首の裏が強く押さえつけられて、私はやっと自分がうなだれている事を知りました。罪人のように床に膝をつき、両側には私を散々殴った男たちがいて私を取り押さえていた。頭を引き上げられ、前を見ると、ベッドの上に折り重なるようにして幾つかの死体がありました。デズデモーナの、エミリアの、オセローの。流れ出た血はどす黒い。彼らは皆自分の死に場所を唯一に定め、相手の名前を呼びながら永遠に沈黙したのです。

誓いに意味などなかった。嫉妬と復讐に狂っていたオセローは、キャシオーとエミリアの涙ながらの訴えを聞いた途端、今度は私を罵倒し、腹を剣で刺した。砦の上で私に副官の唯一をくれた男は、そうやって私からすべてを奪い去ったのでした。残ったのはこの腹の傷だけだ。妻を失った報復のつもりか。こうやって痛めつけて私を絶望させたかったのか。だが、痛みなどありません。私はもうとっくに生きていなかった。死体を何度

刺したところで苦しみはしないのです。私があなたのために為したすべての事を忘れ、私の知恵に命を救われた多くの闘いを忘れ、自らが負った妻殺しの罪さえ私のせいにするあなたのために、私が苦しむ事は決してない。

ああ、腹の血が止まらない。お前にはこの血が何色に見えるか。腹の中の空洞が見えるか。一生懸命に得た信頼も、副官の地位も、この心臓でさえも、身勝手に馬鹿な奴らによって失われてしまった。もはや痛みも渴きも感じない。おれの為すべき事はもうすべて終わったのだ。落とした心臓はきつとあの砦の上。將軍に副官だと選ばれたあの瞬間に置いて来た。だからもう、このおれには何もない。お前たちの求めるものをおれは何一つ話しちゃいないのだ。

今夜は私にとつても最後の夜だ。夜が明けたら、どうか、將軍の棺の横に私を並べて下さい。最後まで私を隣に置かなかった酷い人の、その隣で私は永遠に口を閉ざします。

「オセローの悲劇における調査報告書」より抜粋

■オセロー

死因..失血死(自殺)

経過..デズデモーナを殺害後、剣を用いて自ら心臓部を刺突した

■デズデモーナ

死因..窒息死

経過..オセローにより頸部を絞扼された事による窒息と判断される

■エミリア

死因..失血死

経過..イアゴーにより剣で刺突され、多量出血をきたした

■ロダリーゴ

死因..刺創による臓器損傷

経過..イアゴーにより剣で刺突され重篤な臓器損傷を受けた

補足事項..一時的に意識を回復し、犯行状況について供述。キャシオーを刺すよう焚きつけたのはすべてイアゴーである旨を証言した。

以上、本件に関する記録を終了する

以降の判断は総督とヴェニス政府に委ねるものとする

This tragedy hath been wrought by one of the most vile and contemptible villains.

As the new governor of Cyprus, succeeding Othello, I do humbly request that arrangements be made to transport the bodies unto their native land after the funeral rites are performed.

Furthermore, I do require that a gibbet be prepared for public execution.

For, in my sense, 'tis most unhappy for the villain not to die beside Othello.

I would fain offer mine deepest condolences to Othello and Desdemona.

By Governor Michael Cassio

このたびの悲劇は悪辣極まる一人の悪党によって
なされた。

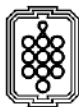
オセローに代わるキプロスの総督として、
夫妻の葬儀ののち本国に身柄を輸送する手配を依頼
したい。

それから、見せしめの籠の用意を。

將軍の隣で死ねない事が
あの男への最大の罰である。

オセロー將軍とデズデモーナに哀悼の意を表します。

総督 マイケル・キャッシュー



葡萄文庫

証言

原作…ウィリアム・シェイクスピア

改作…吉田美悠

発行日…二〇二六年一月二十六日

印刷所…

Mail : ha240981@sr.fukujo.ac.jp

本作は原作とは関係がありません
